

これ等の劣勢を支配するものは何であるか。

恐らくは東北自體の氣象狀態、地理的位置によるものでもあらうが、それにしても「政治上の特恵條件及び關東平野と云ふ強大なる直周の後背地を有すること」により世界の第二都市と迄増大した大東京の存在自體が最大理由にならずとは何人も云ひ得ない（これを逆に東北あるが故に大東京が膨脹したのであると説く途もある）。

この間の謎をとくものは恐らく關東平野の人口増減圖、大東京人口増減圖、東北地方人口増減圖の三者の比較であらう（圖面略）。

よつて先ずこの根本原因たる大東京の吸引力を除くことが重要問題である。

これに對しては既に大東京は國土計畫暫定措地として工業規制を斷行した。

この處理方法にして効果を發生するやうにならんか。地方振興策にして過去に不可能なりしもの必ずしも今日の不可能事でなくなるのである。そこに東北再建の曙光も望み得ようと云ふ譯である。

三 東北生活圏の實相と計畫

さてかくして大東京地方計畫を前提として東北地方計畫の主課題「生活圏建設」に着手する譯であるが、それには一應現實の人口配置の形式に顯はれた生活圏の状態を見、然る後人口配分を爲す段取りを採らなければならぬ。

先づ全東北の地域は縦に四五〇軒である。よつてこれを南東北及び北東北に分ち南東北の中心を仙臺としこれに半径一五〇軒の圏域を與へ北東北は青森を中心に一五〇軒の半圏を描かしめる。

勿論これは仙臺が兩者の上に君臨し再統一す可きこと云ふ迄もない。よつて理想として仙臺の人口を百萬（現在二二・四萬）青森の人口五〇萬（現在九・九萬）とす可きであらう。

南東北一五〇軒の圏内には宮城縣を中心に山形福島の兩縣が入る。

岩手は距離よりすれば北東北圏であるが地形上（北上流域）及び聚落密度より判斷しこれは南東北に入れる可きである。

次に仙臺を中心の五〇千圏を描けば仙臺圏に接し郡山圏、一關圏があり、その外側に盛岡圏が存することになる。これ等の圏内には更に又幾つかの一五千圏が成立する。

その十五千圏の數及びその中心都市の人口の大きさは南部程大で郡山圏には市が四つもあり白河は二萬以上である。盛岡に至つては寂然として人口一、七萬の花巻を有する丈けである。

これ等をして理想的に人口を保持せしめるためには夫々五〇千の中心に二〇萬（盛岡は地方中心として三〇萬）一五千の中心に三五萬その以下の日常中心に二萬を與へ可きである（現實日常中心は殆ど一萬以下又盛岡七・九萬。一關一・一萬。郡山五・七萬の程度である）。

山形及び鶴岡は山脈等にはまされては居るが距離的に見て矢張り仙臺を中心として居る。この兩圏共に市を二つづゝ有して居るが、山形圏の方が都市數及び中心都市人口量から見ても豊かである（鶴岡三・六萬、山形七・〇萬）。

北東北は、青森圏を中心として五〇千圏は八戸秋田となる（青森九・九萬。秋田六・二萬。八戸七・三）盛岡も亦距離的にはこの圏内にあるが山脈の關係及び平野の聚落密度から云つてこれは北東北に入らなす。

秋田は本庄大曲等の一五千圏を有し、八戸は三澤をもつて居る。

青森は野邊地、七戸、弘前、五所、河原等を有し最も肥へて居る。

即ちこれ等を通観すれば東北地方生活圏の實態として次のやうな結論が出る。

- イ、五〇千圏構成に於ては殆ど整備してゐる。
- ロ、一五千圏以下に於ては盛岡、一關、鶴岡等の圏は寂しす。
- ハ、五千圏も亦この状態に準ずるのであらう。
- ニ、尤も以上は諸圏の形式上の整備で人口配置は概ね所要量に對し
 - 一五〇千圏中心は五分の一
 - 五〇千圏中心は三分の一
 - 一五千圏中心は三分の一（山形、福島は稍標準量に近し）
 - 五千圏中心は二分の一、となつて居る。

東北に於ける生活圏現状（數値は人口萬位）

全中心	仙臺	二二・四
地方中心（季末）	南東北	仙臺
その五 生活圏の試案として「東北地方生活圏の構成」		一八三

第二中心(月末)

仙臺

仙臺

—

第三中心(週末)

第四中心(日常)

石卷 三・〇

古川 一・四

松山	登米	佐沼	柳津	米谷	志津川	桶谷	飯野川	本川	岩沼	増田	上關	鹽釜	松島
〇・六	〇・八	〇・七	〇・三	〇・五	〇・八	〇・八	〇・六	一・八	〇・九	〇・五	〇・七	三・六	一・〇

白石 一・三

郡山 五・七 郡山 一

常葉	大河原	村田	亘理	龜田	岩出	鳴子	築館	志岡	三本木	中新田	高清水	古川	小牛田
〇・五	〇・八	〇・八	〇・五	一・〇	〇・七	〇・五	〇・五	〇・四	〇・五	〇・七	〇・三	一・四	〇・三

その五 生活圏の試案として「東北地方生活圏の構成」

国土計畫

三春	〇・八
本宮	〇・九
須賀川	一・八
小野新町	〇・六
石川	〇・六
掛田	〇・三
梁川	〇・六
桑折	〇・四
飯坂	〇・七
二本松	〇・九
小濱	〇・六
川俣	〇・八
猪苗代	〇・四
鹽川	〇・二
喜多方	一・三
福島	五・〇
若松	四・八
合計	一八六

その五 生活圏の試案として「東北地方生活圏の構成」

坂下	〇・六
野澤	〇・五
柳澤	〇・五
高田	〇・五
島田	〇・八
矢吹	〇・五
棚谷	〇・五
森丸	〇・六
鹿島	〇・四
浪江	〇・六
小高	〇・七
湯本	二・〇
小名濱	一・五
久ノ濱	〇・四
四ツ倉	〇・七
平	三・〇
原町	一・三
中村	一・五
白河	二・二
合計	一八七

山形	七〇	山形	一
		氣仙沼	一・八
		水澤	一・四
			一

尾花澤	高田	世田米	盛田	岩谷堂	黒澤尻	大原	千厩	若柳	岩崎	平象	前澤	木戸	富岡	新山
〇・七	〇・五	〇・六	〇・四	〇・七	一・一	〇・六	〇・五	一・〇	〇・四	〇・六	〇・七	〇・三	〇・五	〇・四

その五 生活圏の試案として「東北地方生活圏の構成」

米澤	四・九
----	-----

大石田	地谷	橋岡	寒河江	東根	天童	白岩	左澤	上山	宮内	荒砥	長井	赤湯	高島	藤島
〇・四	一・三	〇・九	一・二	一・一	〇・八	〇・六	〇・六	一・三	一・〇	〇・五	一・七	〇・七	〇・九	〇・四

盛岡 七・九

宮古	花巻	盛岡	酒田	新庄
二・三	一・七	一	三・二	二・〇

老田	小本	岩象	大迫	石鳥谷	日詰	沼宮内	餘目	松嶺	古口	金山	本郷	念珠	温海	加茂	一九〇
〇・九	〇・三	〇・七	〇・三	〇・五	〇・二	〇・四	〇・七	〇・二	〇・三	〇・九	〇・五	〇・五	〇・九	〇・五	

釜石 四・二

青森 九・九
青森 一

五所ヶ原 一・〇

その五 生活圏の試案として「東北地方生活圏の構成」

木造	館岡	中里	全木	蓮田	解田	平館	小湊	遠野	濱吉	大槌	山田	井川
一九一												
〇・五	〇・三	〇・四	〇・六	〇・四	〇・一	〇・五	〇・六	〇・八	〇・二	一・二	〇・六	〇・六

弘前 五・一

野邊地 一・三
田名部 一・五

大畑	鯨ヶ澤	碓氷關	大鰐	藤崎	黒石	浪岡	柳阪	十三	相内	小泊	三厩	今別	一九二
一・〇	〇・四	〇・四	〇・八	〇・六	〇・九	〇・四	〇・七	〇・一	〇・二	〇・三	〇・四	〇・四	

八戸 七・三 八戸 一

大湊	風間浦	大奥	佐井	脇野澤	内川	輕米	三戸	田子	涉法寺	福岡	一戸	種市	大野	久慈	一九三
一・〇	〇・四	〇・六	〇・四	〇・四	〇・七	〇・七	〇・六	〇・五	〇・七	〇・六	〇・四	〇・九	〇・六	〇・八	

その五 生活圏の試案として「東北地方生活圏の構成」

秋田 六・二 秋田 一

本莊 一・四

横手 二・三

沼	大	金	矢	象	金	平	龜	大	五	土	船	船	普	野
館	森	澤	島	淀	浦	澤	田	久	城	崎	越	川	代	田
〇・五	〇・三	〇・六	〇・九	〇・五	〇・五	〇・五	〇・四	〇・五	〇・五	一・八	〇・八	〇・八	〇・三	〇・四

大曲 一・七

花輪 一・〇

その五 生活圏の試案として「東北地方生活圏の構成」

六	大	角	神	刈	横	角	生	田	横	院	湯	増	淺
郷	森	間	宮	和	澤	館	保	澤	堀	内	澤	田	舞
〇・八	〇・三	〇・四	〇・五	〇・三	〇・四	〇・七	〇・五	〇・二	〇・二	〇・四	一・三	〇・八	〇・七

国土計畫

小坂	一・五	毛馬内	〇・五
大館	一・八	大湯	〇・六
能代濱	三・七	扇田	〇・五
		鷹巢	〇・六
		阿仁合	〇・五
		◎深浦	〇・五
		◎岩崎	〇・四
		◎岩館	〇・四
		八森	〇・一
		藤琴	〇・五
		米内澤	〇・六
		二井	〇・三
		鹿渡	〇・六

以上の中◎印を記せるは將來この中に中心都市幾つかを育生せしむ可きを示す。
 (巻末に圖面添附しあり)。

四 諸 試 案

これ等の生活圏は何としても産業によつて裏らづけられなければならない。
 即ち最も幸福なる可き條件はこれ等の人口配置と産業計畫が合致することである。
 然るにこれは必ずしも今のところ全般の氣運がそのやうに行つて居るとは云ひ難い。
 これ等に對し前仙臺土木出張所長金森博士及び東北産業科學研究所は夫々の意見を示して居る。

金森博士の意見

甲、人口配分

一、核心都市	一六〇萬	
大仙臺	人口	一〇〇萬
副中心	秋田	五〇萬
	八戸	五〇萬

その五、生活圏の試案として「東北地方生活圏の構成」

二、工業地帯 一二五萬

八郎潟 九〇萬(三〇萬—一〇萬を一圓として分散)

小名濱 一〇萬

青森 五萬

石巻 一五萬

その他 五萬

三、農耕地 二五萬

備考 この人口自然増加は年一〇〇萬として三〇年間に補充する(實際には年四〇萬)これに對する食糧は地域内米産一二〇〇萬石でまかなふわけであるが安全をみて一〇〇萬町歩の開田を企圖する。

乙、土地開發

工業地帯 三〇〇〇萬坪

大仙臺地帯 五〇〇萬坪

八郎潟地帯 一七〇〇萬坪

小名濱地帯	一〇〇萬坪
青森地帯	八〇萬坪
石巻地帯	二〇〇萬坪
大船渡地帯	八〇萬坪
農耕地帯	一五萬八〇〇〇町歩

又東北産業科學研究所の提言は次のやうである。

地積	現人口	都市
仙鹽地方 二六〇方軒	三一萬	仙臺、鹽釜
平、小名濱地方 平四五萬坪(工業地域)		平、小名濱
郡山地方 小名濱五一萬坪(工業地域)		郡山
郡山地方 二五五萬坪(全工業地域)		郡山
郡山地方 二一六萬坪(内利面積)		郡山
山形地方 一、〇九五萬坪(工業地域)		山形
酒田地方 八九萬坪(工業適地)		山形
その五 生活圏の試案として「東北地方生活圏の構成」		一九九

氣仙沼地方	大船渡一六〇萬坪（工業適地）	氣仙沼、大船渡
花巻黒澤尻地方	二〇七方里（總地積）	盛岡
秋田船川地方	秋田地方七四九萬坪（工業適地）	花巻、黒澤尻
	船川地方（八郎潟を含む）	秋田、土崎
八戸地方	一六四萬坪（工業地域）	船川
		八戸

以上金森博士の提案に於ては秋田、八戸に工業計畫がなく、又鶴岡、山形、盛岡、一關については何等の計畫がない。

又、東北産業科學研究所の案では青森、盛岡、鶴岡等について缺ける所がある。

寧ろ、それ等の中心都市に對する衛星都市の計畫の方が先行して居る形がある。これは勿論悪いことではないが、順序として中心都市を先づ充實せしめる必要があるのである。

この順序をあやまる時、中心都市は解消し地方生活圏は崩壊するであらう。

尤も、これ等の都市にしてもその工業上の立地條件悪しければ、そこに無理がある譯であるがさればとて東北に於けるいかなる土地と雖も、取り立て、特に機械工業に迄不適なりとは云

へない。よつて生活圏提唱の人口計畫と工業立地條件による人口配分との食ひ違ひの人口の補充は主として機械工業によることにし、時にそれがその周圍に多くの工業的衛星都市を有し得る中心都市ならば高度文化施設及び一般文化施設の整備に重心を置き、それ等の工業化と併行して積極的に整備すれば好いと云ふことになる。

恐らくこれ等の點が東北地方計畫に残されたる重要な問題であらう。

五 留意と吟味

以上一應の計畫に對し尙注意を要するは工業誘致に對する東北的方法の有無、中心都市の文化計畫、農業に對する工業調和及びそれ等の實施に關する方法論である。

(一) 工業誘致に對する東北的方法

工業誘致は今や全國的に行はれて居る。従つて東北に對し特に工業誘致するに關してはその情勢に應ず可き特殊な方法を考へなければならぬ。

その五 生活圏の試案として「東北地方生活圏の構成」

例へば今日一般に工場誘致の方法として考へられて居るのは

固定費助成

金銭助成

土地助成

整備

地上権

併せて土地助成と見得可し

經常地と助成

免稅

公共施設使用料

電力

(拙著、日本國土計畫論、我國各都市に於ける工場誘致の概況参照)

即ち先づこれ等については東北に於ても他と同様、考配して置く必要があること云ふ迄もない。然しこれのみならばあへて、工場が東北に來なければならぬと云ふ理由にはならない、そこでこれには何としても自力以外に(それに加へて)

官公による資金の融通

官公事業の優先下請

官 工 場 の 移 設

軍 工 場

等國家の力が加へられるに非ざれば如何ともなし難い。

殊には従來員達の(指導級の)要求する第一條件たる文化施設(特に子弟の教育)に對して

はこれを自然發生にまつことなく、國の補助政策による必要があると考へられるのである。

尤もこゝに東北労働者が労働質として精神上肉體上優れたものであることは大きな利點でも

あるからこの點の維持及びこの點の宣明も勿論重要である。

(二) 中心都市の文化計畫

つゞいて重要なことは仙臺その他の中心都市にして大工業地化されんとする部分についての考慮である。

かゝる急激なる工業化は八幡、川崎その他の如く屢々汚濁せる環境を醸成し易い。

従つてかゝる都市は特に工業地帯とその他の地帯の遮斷を充分行ひ市中は工業地と云はず住

その五 生活圏の試案として「東北地方生活圏の構成」

宅地と云はず都市美化を徹底せしめなければならぬ。特に都心地區の確立及び水邊施設についての考慮がほしい。

(三) 農業に對する工業調和

農業に對する工業調和は東北に於て最も考へなければならぬことで、一度これを誤れば日本の人口及び食糧支柱を倒すことになるのである。よつて工業化に要する人口は出来るだけ、東北人の歸郷人口（東京等より）及東北人口の自然増加によつてまかなはなければならぬ。これによりまかなふ可き人口量次の如くである。

東北人歸郷人口

七〇萬人（昭和五年調査により東京の一割として）

東北の自然増加

六五萬人（この中郷土に止るもの四一萬人）

これに對し工業は五四九—三七一萬の人口を要求する。

これは四—五年にして到達し得る。問題はこれの農業に對する調和であるがそのためにはあく迄工業を農村に入れる方法が熟慮されなければならない。これに對しては、工業中心へ通勤せしめる形式を採るか、村内工業とするか決定しなければならない。一説としてはむしろ農村

は無工業地域として保存すべしとなす説があり得る。俄かにいずれとも決定し難いが兎も角一地域を二つの工業中心によつて使用することは絶対にさけなければならない。そのためには工業中心は何としても三〇千以上の距離をはなす必要がある。

第三の調和條件は食糧自給である。

東北地方の都市並に農村人口表

縣名	總人口	都市人口(%)	農村人口(%)
青森	1,000,500	418,964(41.9%)	581,536(58.1%)
秋田	1,052,750	421,529(40.0%)	631,221(60.0%)
岩手	1,052,750	333,514(31.6%)	719,236(68.4%)
山形	1,129,336	377,330(33.4%)	752,006(66.6%)
宮城	1,271,336	526,333(41.4%)	745,003(58.6%)
福島	1,652,532	542,360(32.8%)	1,110,172(67.2%)

これに對し地方中心たる仙臺を二〇〇萬、青森を五〇萬とし第二中心を二〇萬、第三中心五

その五 生活圏の試案として「東北地方生活圏の構成」

國土計畫

二〇六

萬、第四中心を夫々二萬ならしむるには

地方中心に於て	一一七七萬	第三中心に於て	七八・一萬
第二 " "	一〇一・三萬	第四 " "	二五二萬(七五・三)
計	五四九・一萬(三七一・四)		

と云ふやうな人口を加へる必要があることになる。

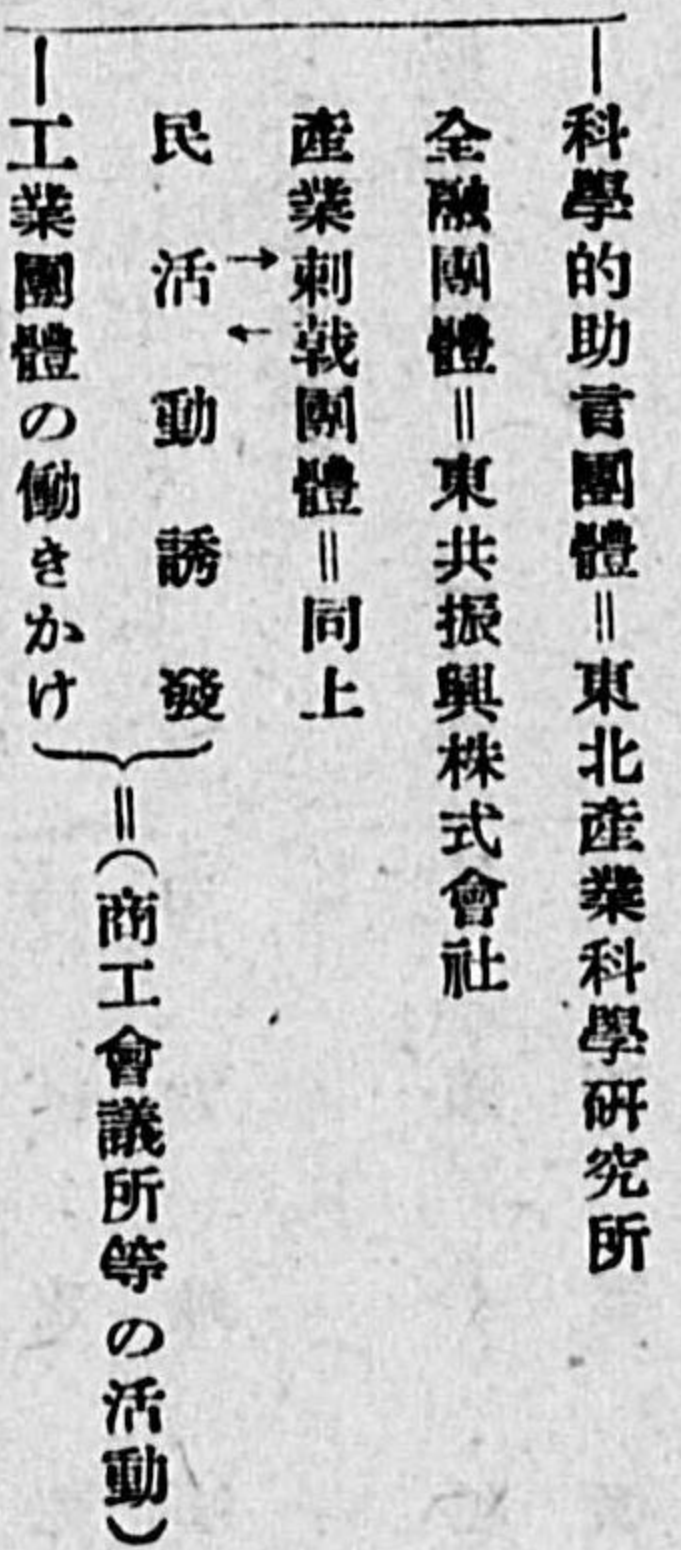
これを東北の既存總人口七一六、四萬に加ふれば一、二六五萬五(一、〇八七、八)となる。これは正に昭和十四年東北産米額一、二六四萬石に近い數値である。よつて安全を見るために第四中心を人口一萬級に止れば()内の數値となり食糧上の心配は起らないことになる。

(四) 實施に對する方法論

以上諸方策の實施をいかにすべきか。これを法律上の「計畫」によつてのみ企圖すべからざることは云ふ迄もない。

又これに對し、官公の土木事業、電力の配給と云ふやうなことをのみ行つたところで如何ともなし得るものではない。そこでこれに對しては科學的助言・金融助成及び民活動の誘發助成、工業團體への働きかけ等が必要である。これ等に對し現在では次のやうな活動が行はれて

居る譯である。



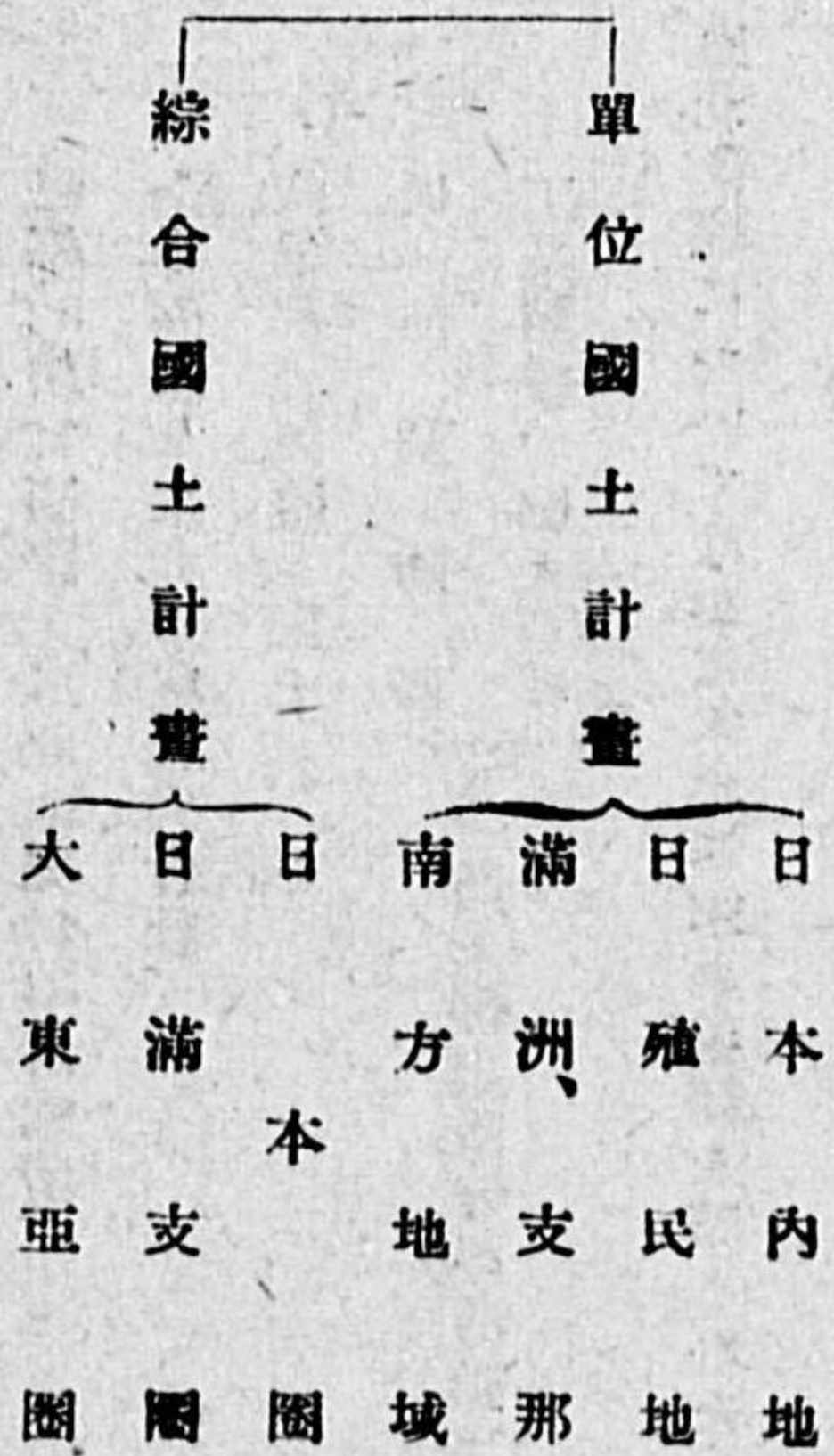
附記 東北問題については更に本書卷末の追補を讀まれたい。

その六 大東亞國土計畫の構想

(大東亞國土計畫の必要性についてのべることは冗長であるから省いて直ちに本題に入る)

一 大東亞國土計畫の構成

大東亞の國土計畫は先づ次のやうな分類をもつて居ると考へなければならぬ。



即ち單位國土計畫は夫々の民族生活的な一單位國土の中の計畫で、或は嚴密には他と區別出

來ないかも知れず、可成り便宜的であるが、兎も角一應何人も是認し得る地域なのでこれを一まとめとして計畫するのである。

一 綜合國土計畫はこれ等の夫々の單位的な計畫を第一次には内地殖民地を含めての圈内に於て第二次にはこれを日滿支の近接地域に於て第三次には大東亞全體に於て綜合するのである。

これは若しそれが自由主義經濟のもとに於て、且つ共榮圈的構成を求めるのでなければ何でもなく出来る。然し我々が目下當面して居るやうな場合に於ては何としても日本の盟主性を強調する必要がある。そこにたゞ單なる寄せ集めでは果し得ない所が生ずるのである。

即ち夫々に任務を與へ結局に於てそれが日本の盟主制を成立せしめ得るやう組立てなければならぬ。

このことが上位理念となつて各單位國土計畫の性格を決定するのである。

二 大東亞國土計畫の課題と方策

さてかくして、考察は先づ大東亞全面の國土計畫的課題の決定から始められなければならぬ

これに對しては種々多様なものがあり得ようがその主要なるものは結局に於て「對世界戰體制の整備」であらう。

地政學上の論者達も今次の大戦の結果、世界が亞、歐、蘇、米の四圈におさまるべしと云ふやうな説を成して居る。

その分類の是非は別として、兎も角現實に歐羅巴共榮圈と東亞共榮圈は既に完全に成熟しつつある。これは然しながら永久に夫々の現在の圈にて終る可き性質のものとは思へない。必ずや他の共榮圈を併せやがて、東亞二圈となる日が遠からざる可きことは想像される。

然りとせば我々はその日のためにも言下の問題としてこの東亞共榮圈の對戰體制を固めることを第一としなければなるまい。しかもこの要請が他の諸々の要請と相容れないなら兎も角、結局に於て他の要請を抱擁することが自明であるとすれば我々はこれを唯一の課題として取り上げて差支へないと思ふ。

然らばその對世界戰爭體制の整備はいかなる方策を必要とするか。
それは總ての國土計畫方策同様

自給經濟の樹立
民族計畫
防衛整備

と云ふやうなことになるらう。

その中自給經濟は何としても對戰體制の第一位にある。このことなく、現代以後の戰爭の性格たる可き長期戦に勝ち抜く譯にいかない。又この多様な民族が廣汎なる地域に散布してゐる場合これを統合して強大なる民族力を發揮せしめるには何としても民族自體に對する科學的な處理が必要である。

而して最後に積・極的にこの廣大な地域を衛る可き防衛施設が施さる可きこと云ふ迄もない。

三 自給計畫

そこで各論に入れば自給計畫に於ては云ふ迄もなく先づ第一に東亞共榮圈自體が他の共榮圈に對し自給的でなければならぬ。

然る後各單位國土の夫々の自給計畫に進むことになる。

この後者の重要性は防空及び大東亞特有の海上連絡性と云ふものから出て来る。即ち各國土が餘りに分化し過ぎるやうなことになるればその一部に支障があつた場合それは直ちに——よし大東亞全圏内の自給がいかに充分保たれて居るにしても、全圏構成の必死條件となるからである。

即ち自給計畫はこれを共榮圏全體の自給、及び單位國土夫々の自給と二つに分かたれたることになる。

1. 大東亞共榮圏の全圏自給計畫

これに對しては諸種の統計が既に出版され明細に資料を提供してゐるから、あへて資源論を繰り返す必要はないが、自給計畫として重要な問題は結局それが「民族量に比例しての自給計畫」及び「民族の現實消費量に比例しての自給計畫」と二つに分けて考へられ得るのであるがそのいづれを採るかである。

而して實際上の決定を要するは後條件の方である可きであるがこれは今俄かに推定し難

5。

よつて頗る漠然たるものであるが安全計算たる前者についての諸説を綜合し、それに應ずる國土計畫の任務を考察して見る。

先づ第一に我々は東亞の人口量六、七億が世界の總人口二二億の内三〇%なりと考へよう。而して大東亞國土計畫の任務が結局に於て彼等を歐米同様の繁榮に導くにありとせば重要生産の總てに對しても三〇%を與へなければならぬことになる。

然らば大東亞に於て世界の生産の三〇%以上を示すものは何であるかと云ふに、

マニラ	麻	(100%)	生	絲	(20.0)	大	豆	(66.1)	
ゴ	ム	(69.6)	コ	ブ	ラ	(64.1)	米	(68.1)	
タングステン		(55.6)	錫			(55.6)	菜	種	(55.5)
胡麻	子	(53.3)	落	花	生	(53.3)	茶		(53.5)
タバコ		(33.3)	亞	鉛		(31.1)			

と云ふ程度のものである。

その六 大東亞國土計畫の構想

この中戦争遂行上あくまで必要な棉花、羊毛、木材、パルプ、セメント、原油、石炭、鐵礦、銑鐵の如きはいづれも一割以下であるとされて居る。

尤もこれは發掘量であるから埋藏量はこの他にあるとしてもそれが石炭に於て、五%、石油五%、鐵礦六%、と云ふのでは必ずしも満足し得る量ではない。

勿論これによつて直に大東亞共榮圈の戦争遂行價值について論ずることは輕卒であり、専門家の意見等によれば一般需要は別として戦争遂行上には十二分の量を有するものであると云ふことにはなつて居る。従つて一應の心配はいらぬとしてもこれを以て永久に安定せる形式なりとすることは行き過ぎであらう。

結局に於てこれは次表等より推測していつかは歐羅巴共榮圈と手を握る可き性質のものであることが解せられるのである。

大東亞共榮圈の不足とする重要産物につき世界の比率を見る。

人口比率	大東亞 準東亞 計		歐 計		準歐 計		米
	(印濠)	(佛獨伊)	(英本國を含む)				
綿	九・一	二・六	二・七	七・八	二九・五	—	二九・五
人口比率	三三・〇	一七・五	五〇・四	八・〇	五九・五	一一・〇	六九・五
							三三・〇

羊 毛	原 油	石 炭	鐵	ボーキサイト
三・一	二六・二	三・一	三・八	五・五
三・一	〇・五	六・三	三・二	〇・六
三・一	三・六	二・九	三・二	〇・六
三・一	八・一	九・二	七・〇	六・一
三・一	二二・七	一九・〇	一八・六	四・八
三・一	二七	二八・二	二五・六	四・九
三・一	五四・七	一八・六	四・四	—
三・一	二七・五	四・八	三〇・三	四・九
三・一	二七・五	三・三	三九・四	一〇・九

これは勿論完全な資料とは云へないけれどもこれ等により大東亞共榮圈があくまで濠印を必要とし更に歐羅巴共榮圈と廣域なる經濟圈構成をなす必要があることが解る。

而して又英國が存外に弱力にして結局米國が相當な抗力を有することに對してはいずれも一應注意を與へて置く必要がある。

備考 大東亞共榮圈(印濠を含み)を含みたる大東亞共榮圈は結局に於て綿、石油、石炭鐵、ボーキサイトに於て未だしく、これを歐亞廣域共榮圈まで擴げれば問題は石油と綿とになることに氣付くのである。

かくしてこの自給計畫は種々の問題を提起する。

即ち以上の如く先づ共榮圏の濠印併合であるが、これは「國土計畫的な要請」ではあれ國土計畫自體としての問題ではない。又、この不足物資に應ずる消費縮少の問題も起るがこれも直に國土計畫であるとは云へない。

結局に於て純粹な國土計畫的問題としては不足生産の強化、代用生産の工夫、餘剰生産の處理に對する土地用途の決定であらう。

不足生産の強化についてはアメリカが南米に綿の栽培を始めたやうに不足物資の栽培乃至發掘に意を用ひるのも當然な事なければならぬ順序である。

但しそれには環境乃至地下條件によつて如何ともなし難い場合があることを考へなければならぬ。

そこに代用生産が考へ出される。獨逸が合成ゴムに邁進してつひに成功せる如きは好例である。その代用生産の資材に従ひ土地用途の決定がなされる。

次に以上のプラス面に對しマイナス面としては餘剰生産の處理がある。

例へば人口三〇％に對し麻、生絲、ゴム等が世界の大部を生産する如きは明かにおびたゞしき餘剰の生ずることを覺悟しなければならぬ。

而してこれを餘剰のままに放置することは當然關係住民の饑餓の原因にならう。

よつて餘剰も亦時に危険を招來す可しと考へなければならぬ。

これに對しては

餘剰生産の不足乃至代用生産への轉換

或は餘剰生産の加工によつて代用生産を補ふ

等の方法が考へられ得る。

その中前者は氣象風土及び將來の共榮圏の擴大することを豫想すれば至難且つ尙早なるを感ぜしめる。

即ち砂糖、ゴム等を生産する風土が必ずしも綿その他の不足物資を生産する風土に適してゐるとは云へない。

又、それ等の特産は將來共榮圏が擴大せる場合は非常な交換價値を潜有するものである。

よつて自分は餘剰生産地に近接し、その代用品轉化加工工業を誘發するを最大の急務と考へるのである。

勿論それ等に對し自分は何等知識をもつものではない。たゞ物の考へ方に對する方法論を示

したに過ぎない。

備考 將來餘剩たる可きものは麻、茶、米、ゴム、菜種、タンクステン、胡麻、錫、落花生、砂糖等であり又さしづめとしてはゴム生絲、大豆、コブラ、錫、タンクステン、米。特にゴムと、生絲——が餘剩となる。
その中ゴムは一應の方策ありとするも生絲は熱帯向きでなしとする説がある。

2. 單位國土自給計畫

以上全大東亞に關する自給計畫について考へたのであるが、つゞいては各單位國土の自給計畫を考へなければならぬのである。而してこのことが如何に至難であるかは次表を見れば解る。

大東亞共榮圈内各國土の重要生産に對する比率(世界生産に於ける)

	日本	滿洲	支那	佛印	蘭印	泰	フィリッピン	イタリー
人口	五	二	一九	一	三	一	一	一
綿	〇・六	八・五	—	—	—	—	—	—

羊毛	—	—	三・一	—	—	—	—	—
原油	〇・一	—	—	—	二・七	—	—	〇・三
石炭	三・八	—	一・一	〇・二	〇・一	—	—	—
鐵	〇・九	—	一・三	〇・二	—	—	〇・三	一・一
ボーキサイト	—	—	—	〇・二	五・〇	—	—	〇・三

即ちそこに可成りな生産偏在が看取される。

又かくの如き不足資源の外に一應餘剩資源と見られるものも總て偏在して居る。

	日滿支圈	佛印、蘭印、泰比馬圈	印漆圈
錫	七・一	二七・四	五・一
タンクステン	◎五・〇	▲二・九	一七・七
アンチモニー	◎三六・九	▲一	▲一・五
米	二〇・九	一七・八	◎五〇・九
茶	一四・〇	一八・六	◎六三・〇
その六 大東亞國土計畫の構想			二二・九

國土計畫

1110

砂糖	六・七	八・二	二三・二
イム	▲ 一	◎ 四四・〇	▲ 七・五
生絲	◎ 八八・九	▲ 一	▲ 〇・一
大豆	◎ 七六・二	▲ 四・一	
棕櫚油	—	二五・八	
コブラ	▲ 〇・八	◎ 三二・三	一五・〇
羊毛	▲ 三・一	▲ 一	三六・二
黄麻	▲ 〇・七	▲ 一	九八・七
綿花	九・一	—	一二・六
落花	八・八	▲ 三・七	五四・〇
菜種	九・五	▲ 一	七三・六
胡麻	一一・一	▲ 〇・九	◎ 六六・三

◎印は著しく過剩 ▲印は著しく不足

よつて各單位國土計畫はこれ等の不足を補ふ計畫を夫々の國土内に於て考へなければならな

いと同時に相互の間に於ての物資の融通を確保しなければならないことになる。
そこに交通問題が必然登場する。

而して若しこの交通確保が保證されることになれば我國の海上權は各單位國土の自給權を或る程度ゆるめてくれるかも知れない。それなれば我々は大東亞圈内の量的自給状態を信頼しそ
の中の細部的自給は餘程ゆるやかに考へて好い。

然るにこゝに問題はこの太平洋圈内に於ける船舶交通に關する異變である。

即ちそこに於て英米船舶は既に影をひそめ我國の船舶の大部分は軍用として寧日なき活動をつ
づけてゐる。

よし我國のそれが全部運輸用として活動した所で要求される所の一五〇〇萬トンに對しては
我國の目下の能力は及ぶ可くもない。

	所有船舶總トン數	年造船能力
世界	六、九四四萬	二、八五九萬
日本	五六三	四四
英	二、一二二	一〇六
その他	二二二	

その六 大東亞國土計畫の構想

備考 北緯一五度以南は海上極めて静かであるから木造小型船でまかなひ得ると云ふ説もある。

かくして我々は一方に於て極力造船業を強化(尤も資材の問題はある)する必要あると同時に少くも相當長き漸定期間單位國土内の自給計畫を設けなければならぬことになるのである(いはば共榮圈内不足物資に對する絶對自給と餘利物資に對する漸定自給と二つの自給計畫が併存する譯になる)。

これ等自給計畫の内容等については精細なる調査を要するので、こゝにはのべないことにする。

四 民族計畫

さてその次は民族の計畫であるがこれにも共榮圈全體に關するもの及び夫々の單位國土内に於けるものとあり得る。

たゞこれは自給の場合と異なり他の大共榮圈との間には大した關係はないものと見てよく主

として大東亞共榮圈内に於ける單位國土相互の關係——むしろ主盟國日本と他の國土との間の關係が最も重要であると云ふことになるかも知れない。

よつてこゝではそれに關しのべることになれば先づ次のやうな項目があげられる。

- イ、大和民族の量の増加と質の改善
- ロ、同上の共榮圈内移出
- ハ、移出人口の變質防止
- ニ、他民族對策

これはいかにも大和民族獨尊の形に見えるが決してさう云ふ意味でなく、共榮圈構成技術の第一段階として止むなき段取りなのである。

1. 大和民族の量の増加率の問題

我々は先づ何としても大和民族の量の増加を企圖しなければならない。結局に於て指導權の確立は主盟民族の量の問題である。

今大和民族七千萬として(日本民族一億)大東亞六七億、世界二二億(英、四・七億、米一

四億、蘇聯、一七億)に對しこれで充分なる比率を保てりとは云ひ得ない。殊に問題となるはこの絶對量に對する増加力である。

例へば我國は大正九年三六・二の増加率を有して居たのに昭和十三年には二六・七に下つた(最近稍々恢復したとは云ふが)。

これが郡部に於ては未だ三三・五であると云へるが人口の半數以上を保有する都市では二四・七に下つて居る。

これを富山二五、石川二五、福井二四等の死亡率と照し合はせればその差額の自然増加に對し誰か慄然たらざるものがあらう。

こゝに出生率は文化度に逆比例すると云ふ説をきゝ世界のそれを見れば

日	二六・七
伊	二三・六
獨	一九・七(最大は一八七六年四〇・九最小は一九一六年一五・二)
米	一七・九
英	一五・一

佛

一四・六(最大一八〇一年三二・九最小一九一六年九・五)

我國のそれも放置すれば尙低下するおそれありと云はなければならぬ。

獨逸は實にこゝに醒めて國土計畫を樹立したのである。

又今我國が特に人口比率の高きを必要とする大東亞圈内には未だ文化程度低き國もあり、そこでは我國の指導方針が人道主義的結果、親善關係が成立すると同時に常に人口増加を強勢される例となつて居る。このことを思へばその相對量の減少は倍率に於て計算されなければならぬことになる。よつてなんとしても對策の確立を急がなければならぬことになるのである。

國土計畫的對策

人口量増大の對策としては種々あり得ようが結局結婚年齢のくり下げ、増殖環境の改善等の問題が上つて来る。

我國の婚期は大體男二八歳女二四歳であるとされて居る。然る時四五歳の出産停止年齢迄に

産出する人口は

結婚年齢(女)	増加人口	結婚年齢	増加人口
一五	五、八五	二一	五、一三
二四	四、二五	三〇	二、六四

と云ふことになる。

よつて二四歳を二二歳に引き下ぐれば結婚件数一つについて一人の増加を見ることになる。

それだけでも大きい。

然らばいかにして國土計畫はこの婚期引き下げに合力することが出来るか。

これを結婚環境について考へて見るとして先づ地域別に觀察すれば妻二四歳を全國平均とし

て

- 一三歳の縣は 東北、北海道、北陸、四國(青森、秋田、岩手の大分は二二歳)
 - 二五歳の府縣は 大體に於て六大都市所在の府縣(東京二六歳、大阪二六歳)
 - 人口十萬以上の都市は二五歳。
- となる。これは農業地方に於て婚期早く大都市程おそきことを示すのである。

而してこれを更に職業的に見れば男子年齢平均二八歳に對し

職業	平均	銀行	公務自由	その他	平均
農	二六・七	二八・四(四・九)			
漁	二六・九(三・二)	二八・一(五・〇)			
工	二七・六	三〇・一			
商	二八・三	二九・〇			
交通	二七・七	二七・七			

かれこれ照應して農業地方生活は意識健全なるため婚期早く大都市は生活標準の誤りたる探り方がこれを遅らせてゐることが感ぜられるのである。この邊に國土計畫技術の鍵の一つが出る。

又全體的な問題として大都市の工業努力吸引が性の構成を亂し時に農地に男子を缺亡せしめ時に女子を皆無に近からしめ大體に於て大都市に青年を偏在せしめると云ふやうなことも婚期に影響すると考へられる。

かくして國土計畫はこれ等に應じ大都市を分散し人口を農村地方へ送り返す施策或は具體的には大都市を小都市化し、農村の定住性化、例へば都市の工業區域は出来るだけ農村より通勤

するものとして構成することを計らなければならぬ。
工業地方分散に長き経験を有する理研系の工場は大體に於て農家よりの通勤工をねらひとして居る。

この他根本問題としてはあく迄農村人の在村比率を確保す可きことが加はる。

(云ふ迄もなくこれ丈のことで婚期を引き下げ得るとは考へられない。婚期引き下げに生活費の引き下げ収入の増加と云ふやうなことも勿論考へられなくてはならないのであるが、それに對しても亦この小都市主義は或る程度の解決を爲すのである)。

参 考

結婚のためにはいかに隣人的構成が必要であるかは名古屋市の初婚調査に於て次のやうな結果が出て居る。

名古屋市内同志の結婚	五五% (全初婚の)
郡部との結婚	一二%
他府縣との結婚	一三%

又各區に於ける數字としては

東 區	同區	郡部と	他府縣と
二二	二七	三九	
西 區 (工業區)	六九	一三	一一
南 區 (工業區)	三七	二六	二九
中 區	二七	二七	三一

大體に於て勞働區は自區内同志が多く、知識階級は他府縣との通婚が増加すると云ふことになる。

又戦争が結婚數に及す影響については歐米に於ては著しきものがあるが

第一次世界大戰前後の結婚率

	獨	英	佛	伊	美
一九一三年	七・七	七・一	七・五	七・五	七・九
一九一六年	四・一	四・四	三・三	二・九	七・五
一九二〇年	一四・五	一三・四	一五・九	一四・〇	一〇・一

我國に於ては平均八・二五、低いとこで七・二三(昭和八年)多いとこで九・七六(大正九

その六 大東亞國土計畫の構想

年)と云ふところを上下し大差なきを示しこれは安心せしめる。

(結婚の問題については岡崎文規氏「結婚と人口」を参照す)。

2. 大和民族の質の改善

身質

大和民族の身質が國土の大都市化と共に年々憂ふ可き傾向にあることにつき贅言を費やす可き必要がない。

たゞその對策としては結局國土計畫的には大都市の疎開、人口の地方分散、農村保留人口の増大以外に方法なきことを感ずるのである。

心質

身質について重要な問題はその精神の大東亞指導者級化である。

我國には傳統の強靱にして美しき精神がある譯であるが明治以來の歐米的利潤至上主義が侵潤して以來實に危険極まる利己主義が心質の一部に巢喰ひ始めた。これは一日も早く除却し去らなければならぬ。

尤もさればと云つて我國に於て誤り珍重される中世的に萎縮した消極精神も直ちに是なりとする譯にいかない。

即ち大東亞の指導者は皇道に即し私心を去ること、大局に着眼して細事にこだはらぬ等の大らかなる精神を具へなければならぬ。

皇道精神は過去數千年の不抜の傳承であるが他の夫々については過去の日本に存して居たとも云へなかつたとも云へる。とまれ新しき性格を創造するのであるとした方が早い。

これに對し國土計畫は都市農村の協同體組成、都市の隣保的構成等の策により應じようとする(前出生活圏の計畫はそれである)。

この心質の問題は未だ餘り重要視されて居ないことだが實は焦慮にたえないものなのである。

備考

こゝに一考を要するは戦争の國民精神に及ぼす影響である。

これについては嘗てルーズベルトも米國青年の頽廢せる精神を救濟するは戦争より他になし

と云つた程である。
我國の利潤精神も今次大戦と同時に薄らぎ十二月八日以来完全に後をたゞんとして居ると云つてさへ好い。

戦争によつて心氣消滅する國家もあれば我國の如く常に戦争を機會として大義にかへる國民もある。その點誠に恵まれたりと云はなければならぬと同時に國土計畫と云はず諸政策もこゝに留意し「この際」この線に副つて強く前進すべきであると思ふ。

3. 人口移出の計畫

かくして大和民族の量と質とを増加し改善する計畫を樹立したならば引きつゞいてこれを共榮圏の各部分に移出しなければならぬ。

先づその方向であるがこれに對しては目下

南方 説
北方 説

と二つあり得る。

北方説の出所は民族の南方弱体化である。

南方に於ては民族は精神浮薄となり性格怠惰となると云ふにある。

又平均年齢に於ても

ニュージールランド	六五歳	英國	六二歳
獨逸	六五歳	日	四一歳
エジプト	三〇歳	印度	二七歳

即ち赤道に近き程壽齡も短くなる。

又北方説としては「北方の強」の理論と共に我々が心す可き民族は常に北方にあり、これに對し防衛的植民をしなければならぬと云ふ。

いづれも一説ならずとしない。

然し南方を説くものにも又理がある。その第一は何としても南方に對する英米の影響の拂底である。これには單なる政策の如き成果ありと思へない。

又南方民族は總て我が大和民族に對し勝敗經驗をもたない。そこに指導上の多少の抵抗が感じ得る。

殊にそこには強靱なる生存をつゞけて居る支那の華僑八百萬が繁榮して居る。これ等に對處するためにはあく迄現實に人口を入植せしめる必要があるのである。

英國は植民地統裁の考へより一八一五——一九三〇年の間に、二、四〇〇萬の人口を出した。(年三〇萬、時に一〇〇萬)その中北米へ九〇〇萬カナダへ三〇〇萬、それが今日米洲五〇〇萬のアングロサクソンとなり、世界に七〇〇〇萬の外地人口を保有し得ることになった。獨逸は一八二〇年より一一〇年の間に六〇〇萬年々五〇萬を移出してゐる。

それに對し我國が在外人口六九萬(昭和一〇年)現在と云ふのはいかに劣勢であるか知る可きである。

参考	ブラジル	一七・三	支那	五・八	マレイボルネオ	〇・八
	滿洲	一四・四	比律賓	二・二	蘭印	〇・七
	ハワイ	一一・〇	ペル	二・一	メキシコ	〇・五
	北米	九・八	カナダ	一・九	アルゼンチン	〇・五
	その他南洋委任統治	六・二				

これに對し今後三〇年間に二〇〇〇萬、年三—四〇萬移出すべしと云ふ説がある。きくべきであらう(これは全共榮圏に對して)。

とまれ國土計畫はその入植計畫の準備を爲さなければならぬ。

参考 南方の健康状態を示すものとして次の數字がある。

	内地	一七・五	自然増加
	支那	一四・三	一三・〇
	比律賓	七・六	一〇・八
	馬來	八・二	三五・一
	蘭印	九・一	一二・五
			二二・二

4. 民族の退化防止

移出人口が特に南方に於て退化するおそれあることは明かに一説である(その心配なしとする南方經驗者もある)。よつてこれは慎重考慮の上なされるべきこと云ふをまたない。

その六 大東亞國土計畫の構想

而して一應あげられる可きその對策に絶對處理と相對處理とがあるやうに思へる。
絶對處理

絶對處理とは我が大和民族自體に對する處理である。

これは先づ第一に大和民族居住地域の選擇である。

南方と雖も赤道外に於ては温度はさしたることでない筈である。

南方地域温度表

平均	マニラ	昭南島	香港	花蓮港	東京	マニラ	昭南島	カルカッタ	バタビア	サイゴン	シドニー	鹿兒島	マドラス
	二六・二	二七・一	二二・二	二二・四	一四・〇(八月平均二五・九)	三八・六	三四・九	四四・一	二六・二	二七・八	一七・二	一六・六	四四・二
最高													

シドニー 四二・五
東京 三〇・一

鹿兒島 三一・二

熱き所でも平均温度に於て東京の八月濠洲に下ればシドニーの如きものさへある。又夫々の土地に於ても高地は温度低かる可く、必ずしも熱帯地を想像する必要もないであらう(たゞ光線は強烈である)。

何れにしても大和民族に對しては山間都市の如きものをも與へて置く必要はある。(南洋にも雪をいたゞく山はある)。

又一説としては三年を期し北方居住者と交代せしむ可しと云ふのもあるがこれは民心を浮動せしめる策なりとして考へられない。むしろ潤澤に居住地を與へ定住せしむべきものと考へる。

尤も伊太利のドボラポロ、獨逸のK・D・Fの如く入植人の隔年位の團體旅行により歸郷せしめるのも(専用の船により)推賞すべきであらう。

(南方經驗者は切に移住期節を云ふ。即ち夏期南方に行けば——異狀體質は別として必ず成功するが冬期入植は必ず又、失敗すると云つて居る)

然しながら民族退化も初代に於ては大したこともあり得ない。問題は二世である。二世による精神退化である。

しかも他民族と雜婚せし二世に對しては性格改善のほどこそすべき策がないと云ふ（親を異にし、言葉を異にし、しかも全然本國を知らず）。

幸ひ我國人は頗る雜婚率低きを以て（ハワイの雜婚數に於て日本人一%、支那人三一・七、ポルトガル一四・五）むしろこの傾向を獎勵し、同民族結婚の道を採らすべきである。

そのためには何としても義務教育を本國にてほどこそ必要があり、出來得べくは高等教育も内地にてうけしめ結婚して歸郷せしむる必要がある。

（雜婚が結局、血の裏切り易きことについては古屋博士はその著民族、血、國土にのべて居られる）。

相對處理

相對處理としては協同民族は出來る丈け農業に従事せしめるが正しい。——と云ふ公理を考慮實踐することである。

備考

南洋國土計畫にしては東印度地方の鐵道計畫、ボルネオ、ニューギニアの入植及び新開計畫。

漁業振興計畫、森林事業（内地の三倍の生長度）の計畫等々の問題がある由である。それ等に関する詳細な研究が必要とされよう。

その七 總 結 語

國土計畫は明かに未だ完全に軌道に乗つてゐるとは云へない。乗つた積りで居るのが漸く片軌道である。何となれば、今のやうな精々生産擴充のみを重點とし、これに總ての荷重を傾けてかへり見ない形式であれば、それはやがて、人工と工業の再集中を生じ、それも、生ま中今迄は民族の寶庫であり得た地方に再集中せしめることになるので國土全體としては結局分散以前より惡化する形になる。それはいつか又、その地點に於て再分散の必要を生ずることになる。しかも、その時には、我々は既に「民族」そのものを失つてゐるのである。

この警鐘は亂打されなければならない。これは何としても、未だ國土計畫陣の後にあつて撫然たる厚生、社會、教化といつたやうな精神部門の一步二歩前進するのに待たなければならぬ。これを官廳名で云ふなら厚生省、文部省、等々の國土計畫的前進が待たれるのである。而して恐らくはその結果一つの具體的な方策として地方行政の組織に對し根本的な吟味が加へら

れるのであらう。

都市と都市、農村と都市、地方と地方が夫々「聚落自由主義」「地方自由主義」の色彩でシノギを削つてゐる間は、百の精神計畫も一片の反古である。その意味で我々はそれ等の自治體の解體綜合を結局の「心的國土計畫」の具體的な方法論と見る。かくして自分は現在進行中の「物の國土計畫」を第一期とすればこの「心の國土計畫」こそ國土計畫第二期なりと考へる。恐らくそれは物心調和の第三期を待つて完成されるのであらうけれども、何としてもこれ丈でもその出現の意味は人類創始以來の重要事と考へられ得る。

本書がそれに對する呼びかけの第一聲たる光榮を荷なひ得ればとこひねがふのである。

追補 — 東北に就て —

本書校正中ばにして自分は偶然東北視察の機会を得た。つぶさに都市、工業等を観察し自分の主張に大體あやまちなきを確かめ得た。その記要は次の如くである。

(一) 都市については

イ、都市中心の構成微弱 —

特に、若松、弘前、青森等は甚しい。盛岡の内丸、中津川の一帯、秋田の舊城附近はよく出来て居る。仙臺は存外中心が散漫である。山形が縣廳を正面にして構成してゐるのは生硬過ぎる。

ロ、古き情趣を存するものがある —

若松の鶴ヶ城あたり、盛岡の内丸、中津川あたり、仙臺の青葉城一帯、秋田の縣廳附近及び千秋公園等、東北なればこそその保存されたる風趣であらう。

ハ、消費中心微弱 —

消費中心の微弱性は特に、秋田、若松等に於て甚だしい。これでは地方の文化中心、消費中心としての機能は果し得ない。

(二) 工業については

イ、東北としての損點 —

冬期の寒さは大體に於て條件としてマイナスであること云ふ迄もない。殊に早朝操業開始の時の能率の悪さ、及び屋外作業のやりにくいことは何としても仕方がない。然し、これ等のことは夏期の好條件により回復し得る。

又冬期でも朝の始業時間を三〇分遅らせ、これを晝の休憩時短縮にて回復することも出来る。暖房費は營業費の五%位である。これは仲々効果を得難いが(盛岡の東北振興織維工場では天井を張ることによる工夫をしてゐた)。それより心配なのは燃料の缺亡である。

従つて亞炭、木材等の産出地ではこの問題の解決は比較的樂である。

労働者の出勤と雪及び寒氣の關係は殆どないと云つてよい。

(鑄物の型が凍結して困ることがあると云ふ所と、それは養生如何によつて、解決し得るとする所とあつた)。

ロ、東北としての得點——

東北の工業上の得點は何としても勞働力である。東北の勞働力はその産出量の大きなこと、強健なることの上に最大の得點は信頼し得る勞働力なることである。

一應、それは鈍重に見へるけれども誠實性がやがてこれに打ち克ち、結局に於て最も精密な工業に對する高度の性能をもつといふことを示すに至つた。

殊に郡山等では會津若松の如き傳統ある郷土の勞働力は絶對に「工場渡り鳥的」不信をなさぬと推賞して居る。

ハ、解決すべき問題——

これは根本的問題と云ふのではないが、東北なるが故に過渡的に苦しんで居る問題があつた。それは結局に於て、東京等の經濟中心を去ること遠きため、統制機關の中樞と連絡悪しきこと、も一つは工業の地方化が唱へられるにかゝはらず勞働配給が相變らず大都市中心なるため郷土勞働力が取れないことである。これはいづれも直ちに解決すべき問題である。

き問題である。

(ニ) 研究すべき問題——

研究すべき問題としてはかゝる新開工業地方に於ては下請工業が發達せざるを以つていかなる工場も一應一貫作業の不便を忍ばない譯に行かぬことである。

秋田木材機械工業會社等ではそのために下請組織を有してゐるやうであるが、これはもつと根本的に解決すべきであるやうに思へる。

又、各工場材料及び製品の運輸關係が存外に全國的にのびつゝある(殊に鑛山機械)。この運賃によるマイナスは結局日本の工業全體としての損失になる。これは矢張り東北に大工業基地を造ると云ふことに賛成せざるを得ない。

その一つを仙臺とし他の一つを秋田とすべきことに異論がない(秋田は何としても大工業地としての風格を既に示して居る)。

ホ、助長すべき問題——

助長すべき問題として自分はうれしきもの二つを見た。その一つは青森縣早口に於ける田村鐵工所の郷土的な經營法である。その最特徴としては農家勞働力は主として次男を

採用することである。これは長男をとることにより農村機構を破壊することを恐れたのである。又、労働力は通勤を原則とし配偶者は農事に服するやうにしてゐる。

勤務者に對しては、その勤務年限に應じ一、〇〇〇圓より三、〇〇〇圓に至る生命保険をかけてやつてゐる。——等。明かに郷土工業の體を備へてゐる。

又、他工業の移殖作業としては秋田木材機械、岩手鐵工所等に於てその敷地内の一工場を大都市工場乃至地方の群小工場を綜合せる團體に貸與し、投資せしめ、當方の指導監理によつて育生して行くやり方が成功して居た。

これは恐らく一つの大きな工業分散地方移殖の方法論ではあるまいか。

又、第三としては盛岡に於て東北振興會社の手により尾張一宮の毛織工業が殖移されこれがやがて農村工業化せんとしてつゝあることである。これは實に大きな問題として残る。

〈三〉その他

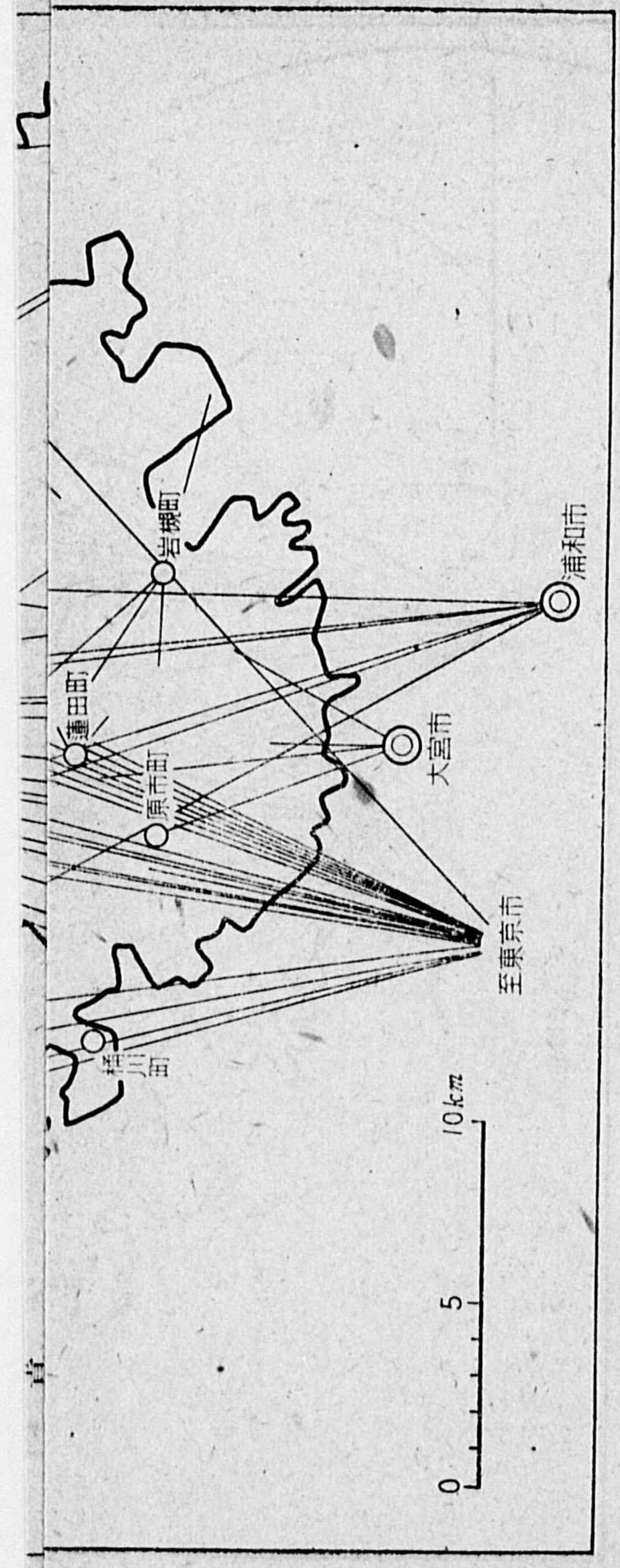
その他の問題としては温泉の豊富なることが着目される。これをナチスの K・D・F の如く、東北労働の厚生慰樂の施設として更に組織的に研究する必要がある。現在の如

く有閑不健全な傾向は排撃すると共にその方の研究が望まれる。

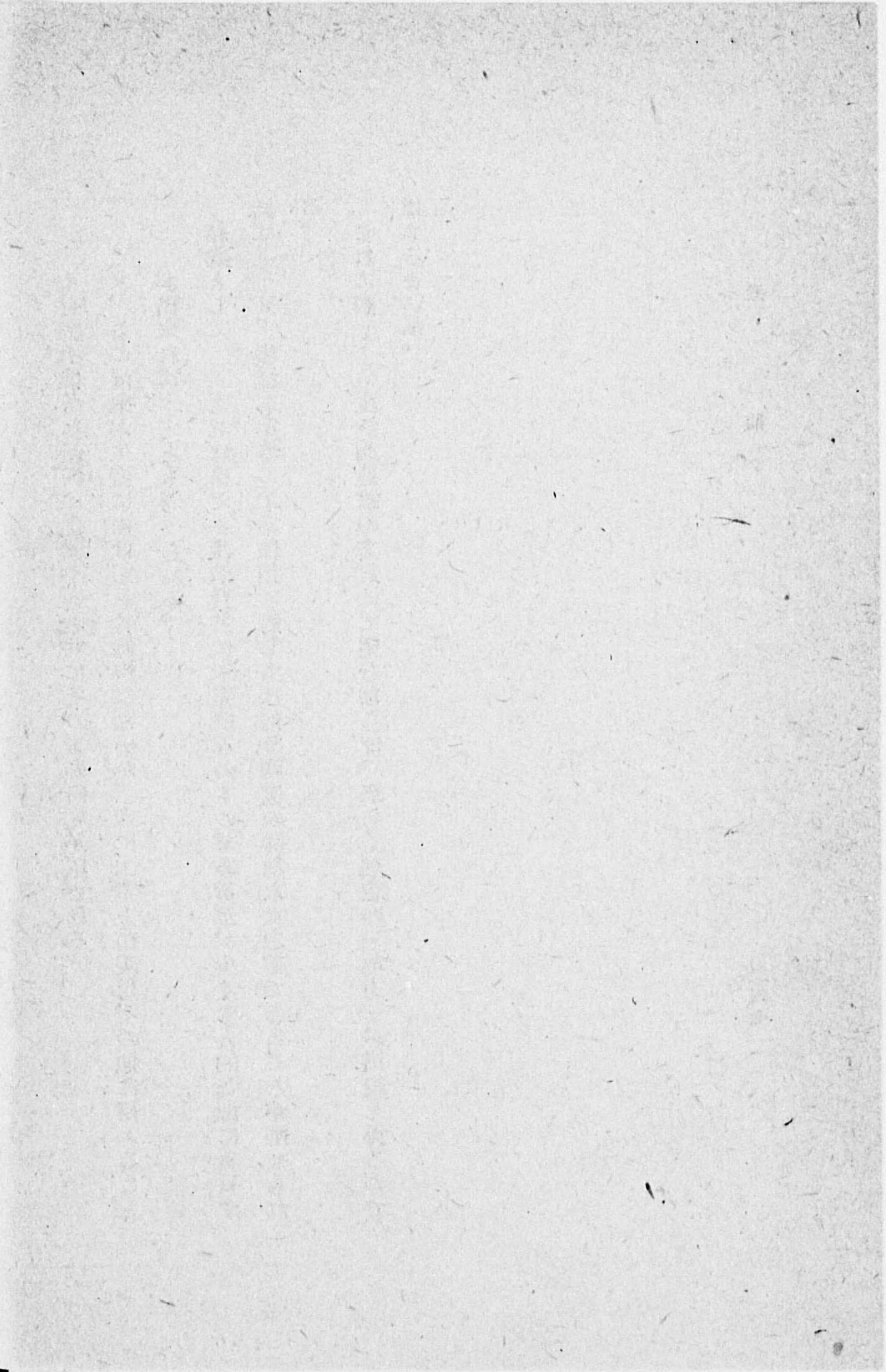
又、この温氣が生産に向けられる餘裕はないか。殊に工業上の暖房その他に用ふることが出来れば……とも考へられる。

結論として——東北はまだ生産消費共に未完成そのものであるが、少くも人的資源に着目すれば——又、機械工業等の工業種類に對しては何等顧慮の餘地なき地帯であることが解せられる。

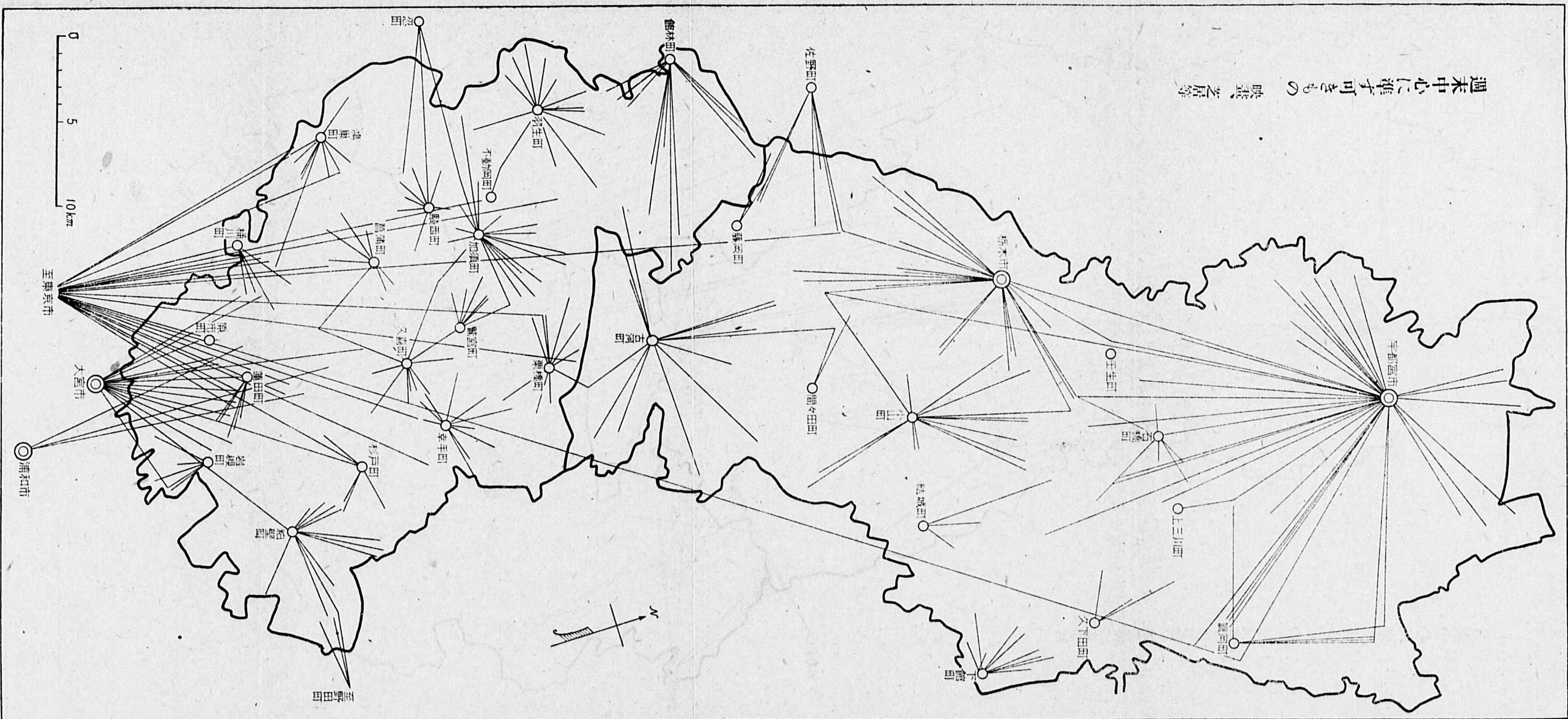
これに對し——生活圈建設の方針にて望むならば、恐らく理想の「地方」が出現し得るのではあるまいか。



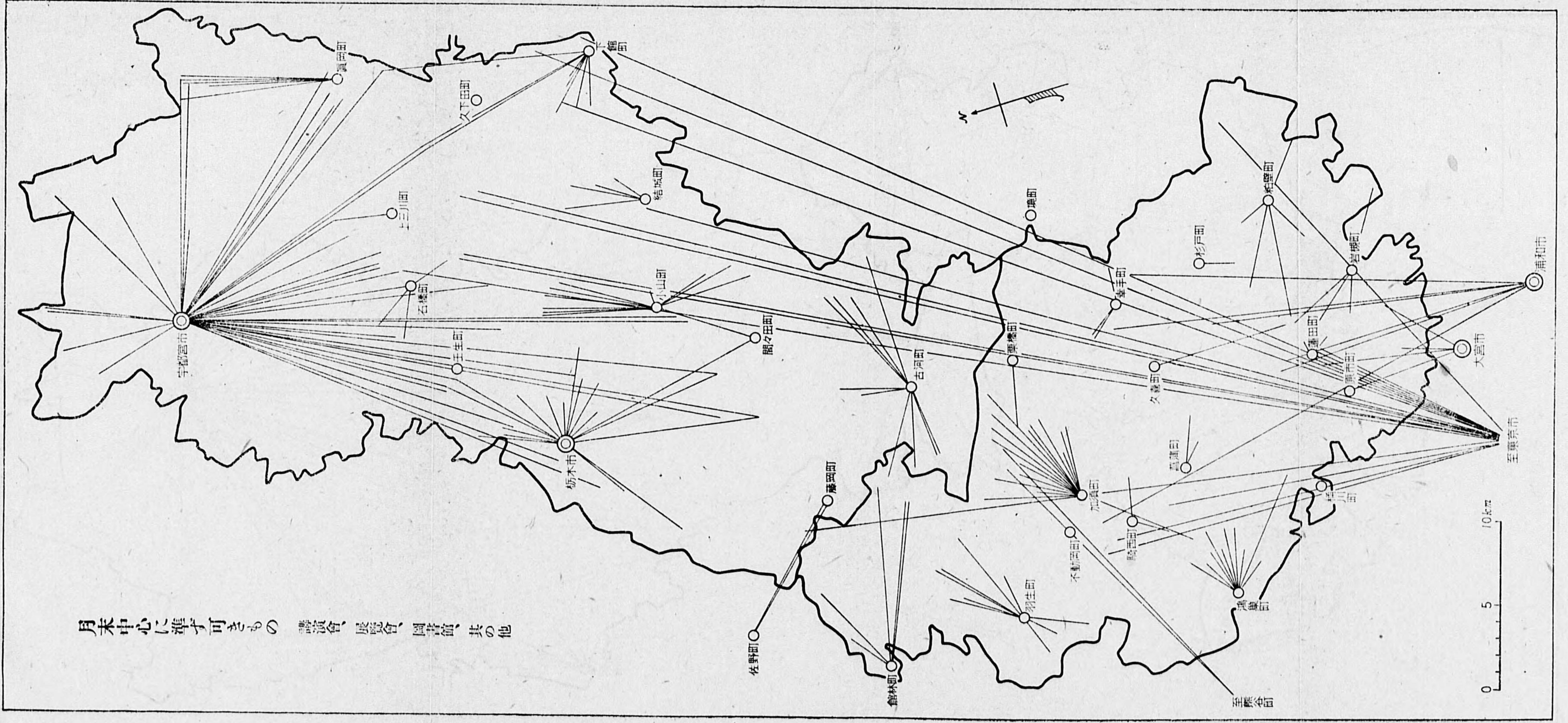
ことを表示する()



週末中心に準ず可きもの 映葉、芝居等

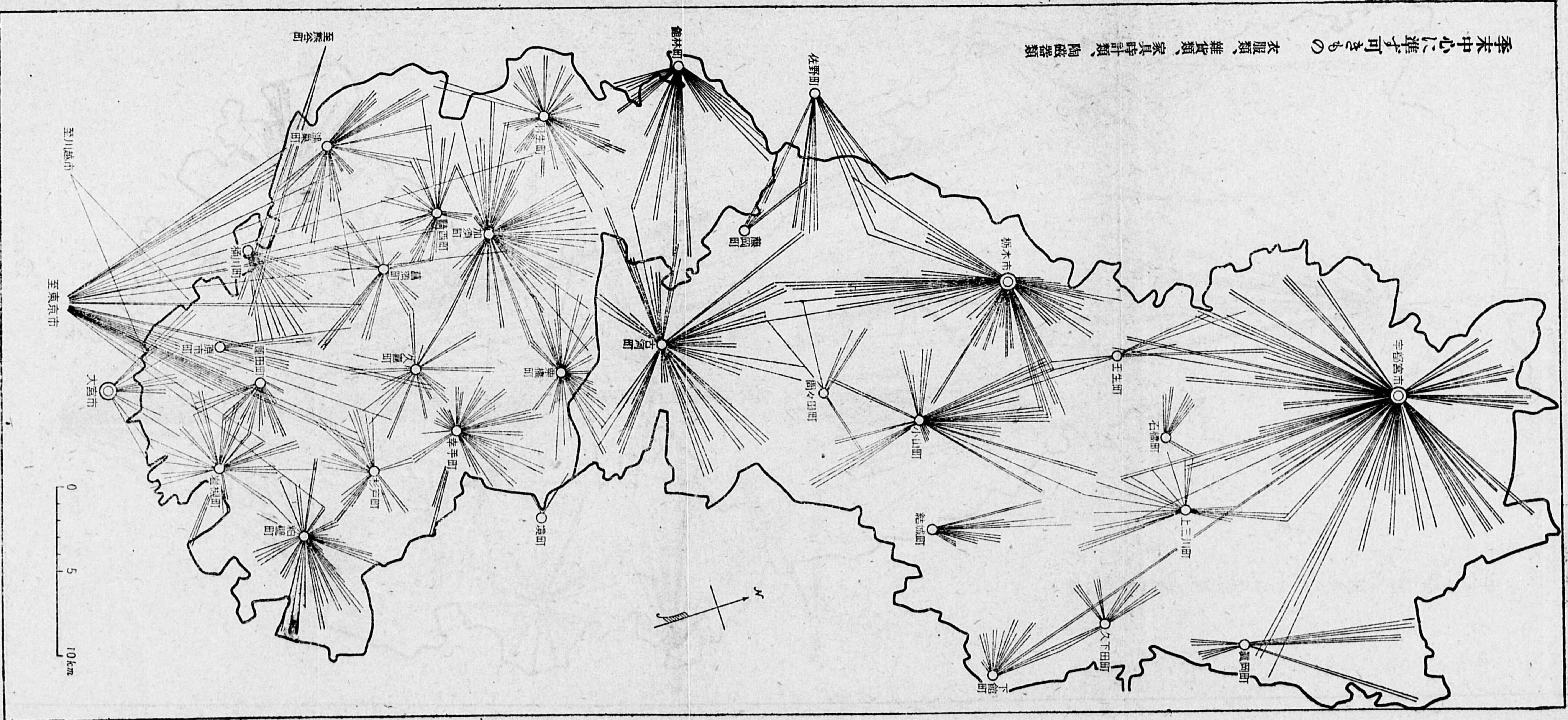


1 圖 關東平野生活圏の調査 (その四、乙、九) 放射線は總てその末端聚落より○乃至●印の聚落へ出向くことを表示する (一線は一戸を示す)。

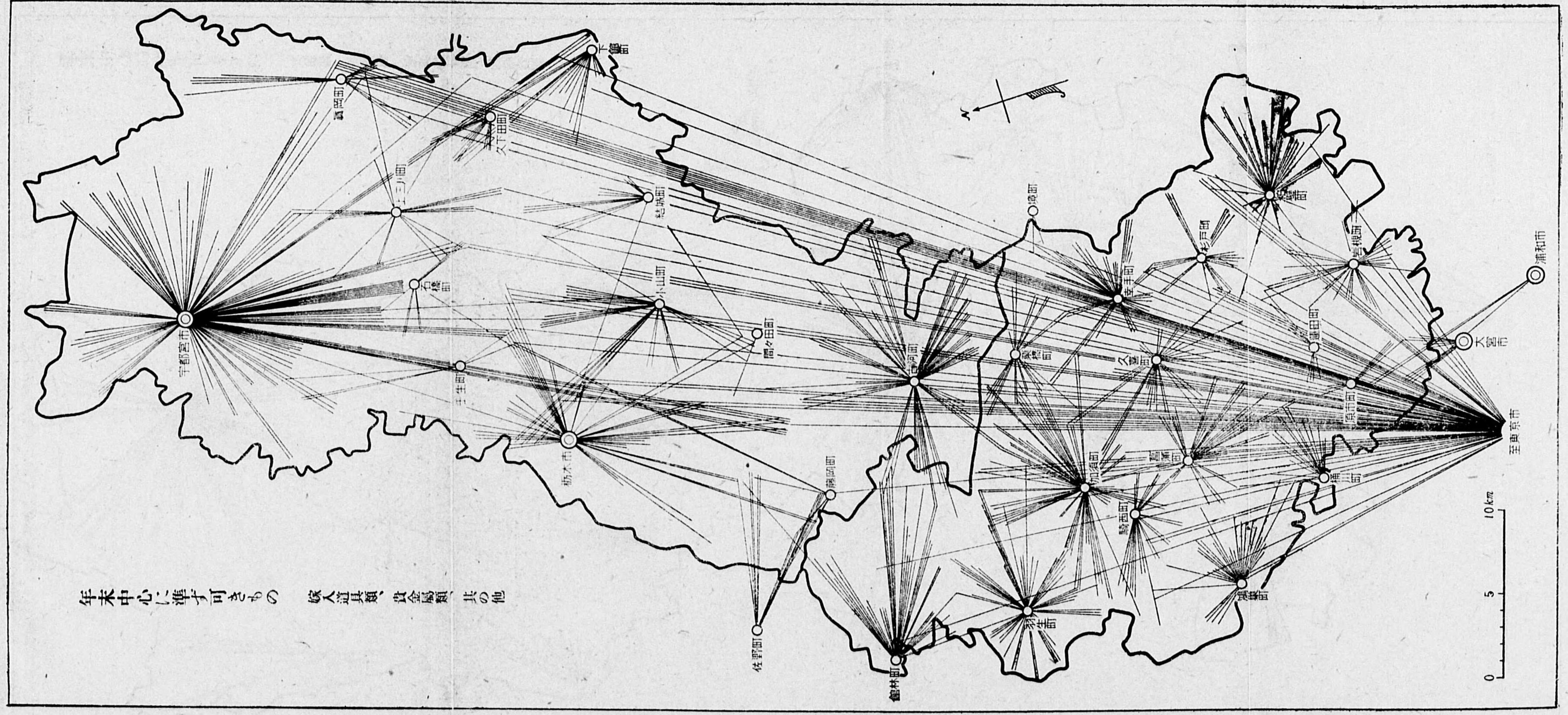


月末中心に準ず可きもの 講演會、展覽會、圖書館、其の他

季末中心に準ず可きもの
衣服類、雜貨類、家具時計類、陶磁器類



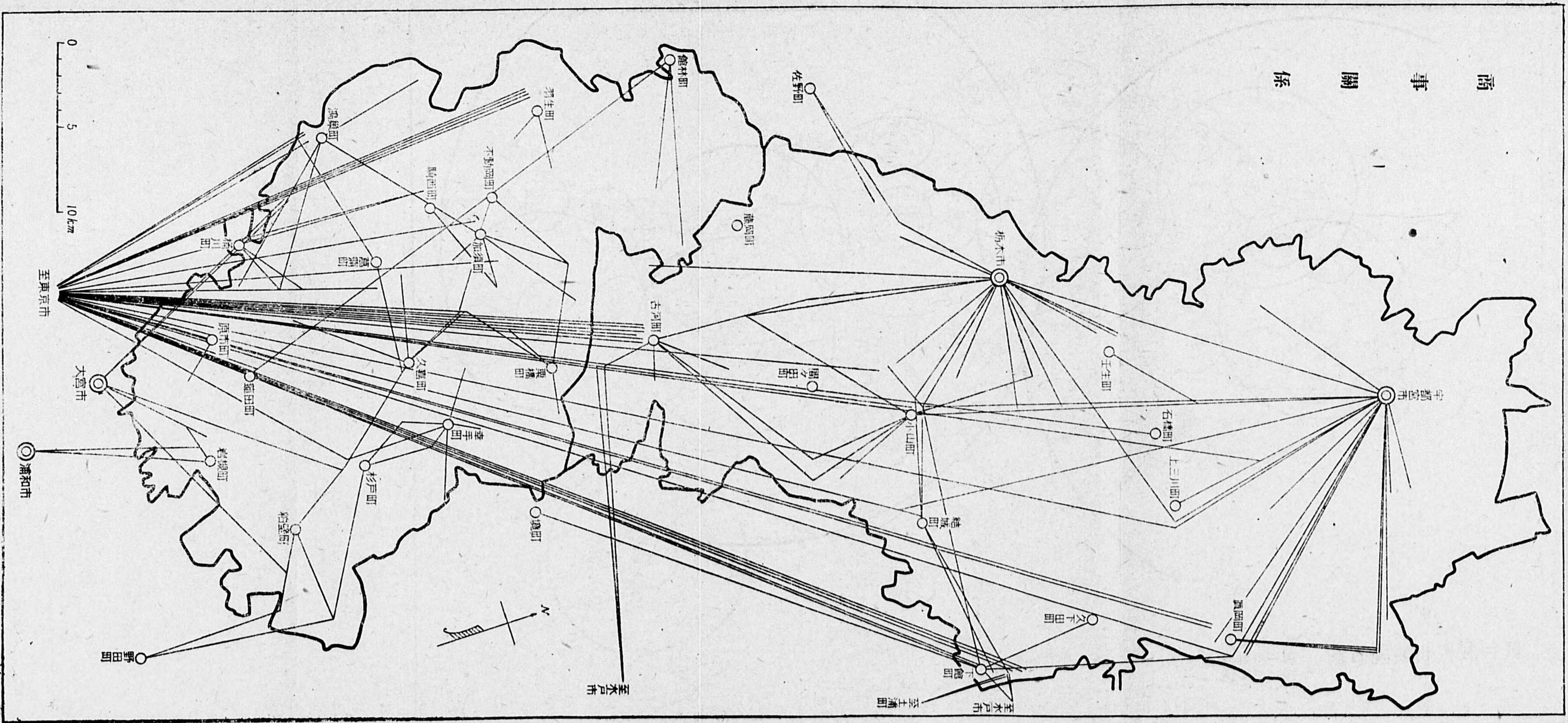
4 圖



年末中心に準ず可きもの 家人道具類、貴金屬類、其の他

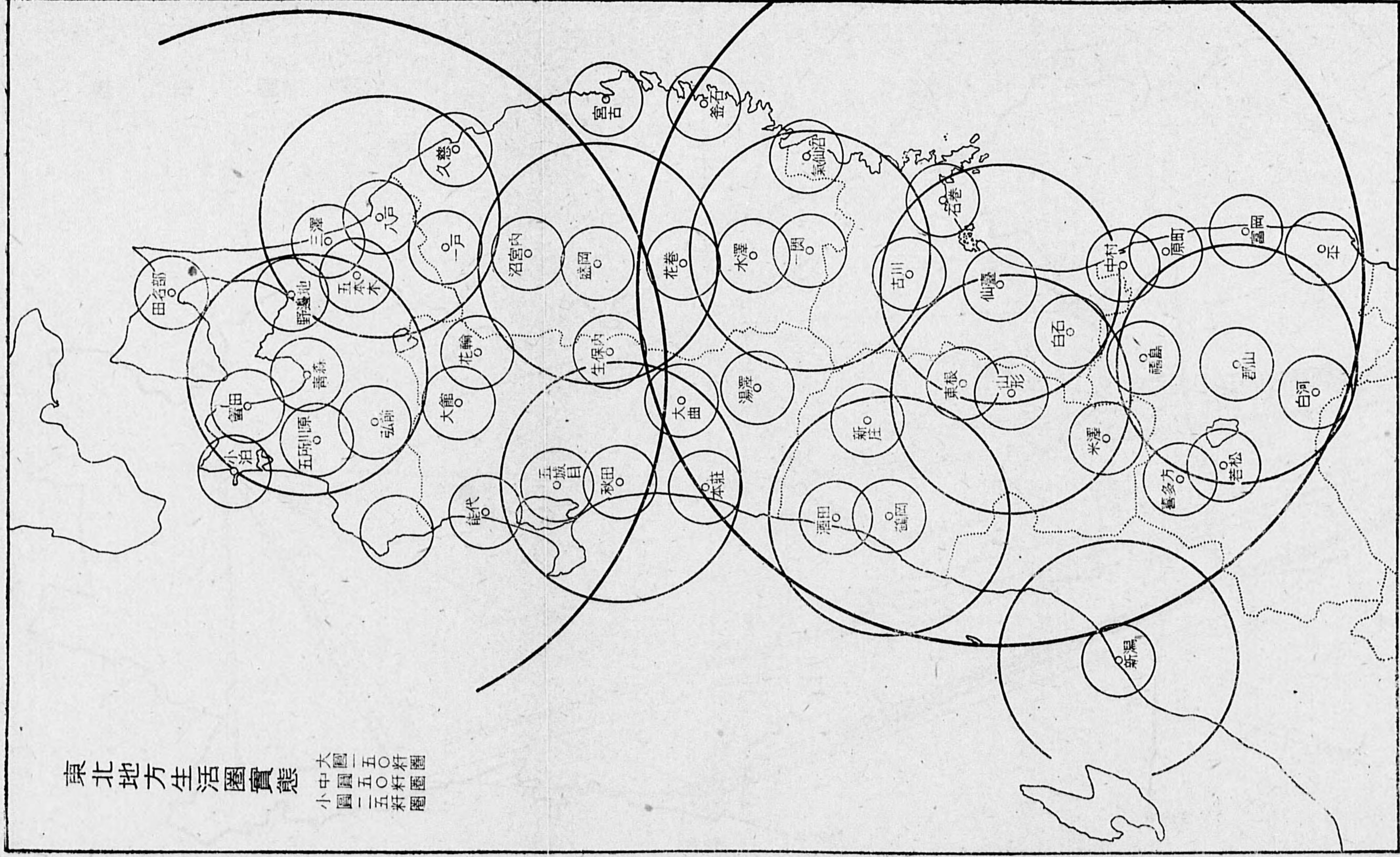
0 5 10 km

商 事 關 係



5 圖

6 圖 東北地方生活圏實態 (その四の三) 各圓はその中心都市の勢力圏 (≡ 生活圏)



出文協承認
あ100.312號

昭和十七年八月一日 初版印刷
昭和十七年八月五日 初版發行

(五〇〇〇部)

國土計畫

—生活圏の設計—

● 定價 一圓五〇錢

著者

石川榮耀

發行者

河出孝雄

印刷者

石井完一
東京市牛込區山吹町三〇五番地

配給元

日本出版配給株式會社
東京市神田區淡路町二丁目九番地

發行所

東京市日本橋區
通三丁目一番地

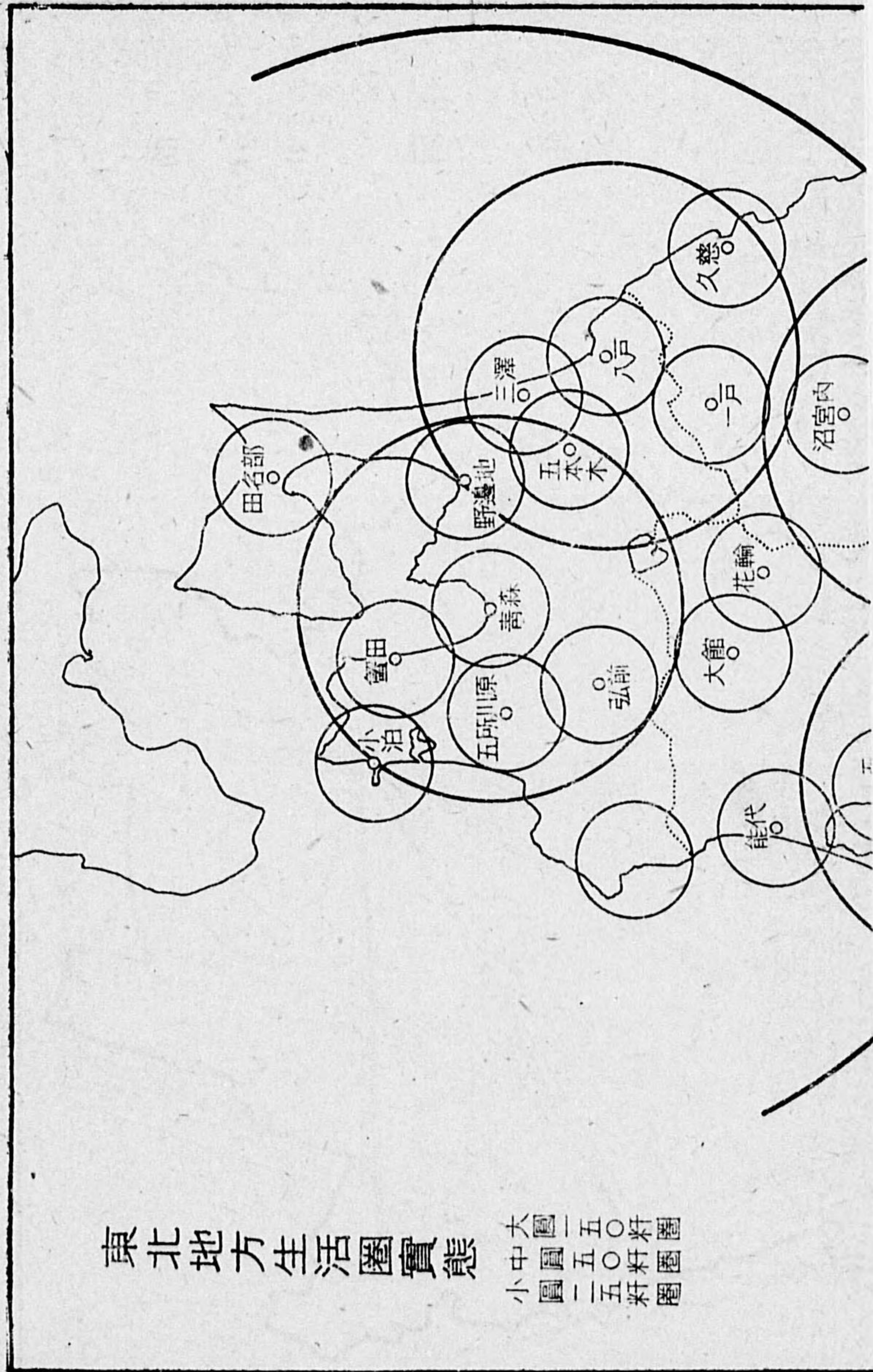
河出書房

電話日本橋(24)二七七七、二七四八番
振替口座東京一〇八〇二番

(日本出版文化協會會員番號一〇六〇六八)

刷印社刷印一第都帝

6圖 東北地方生活圏實態 (その四の三) 各圖はその



「B6規格判・上製函入」
★科學新書 既刊書★

- 大谷 東平著 價一・二〇〇 下・一五
- (1) 天氣圖と天氣豫報
著者は十年來天氣圖と共に暮して來た。その學理、實驗、直観を通じて日常の關心事たる氣象の基礎的技術の諸問題を見事に説明する。
- 服部 靜夫著 價一・二〇〇 下・一五
- (2) 生活の中の植物
社會生活に科學を浸透させる一つの試みとして、吾人の日常生活に深い關係のある植物に就てその生理、形態、繁殖等々の諸問題を中心に著者特有な會話體を用ひて植物學上の多彩な知識を提供してゐる。
- 宮部 直巳著 價一・〇〇〇 下・一五
- (3) 地盤の沈下
東京市特に江東方面の地盤沈下現象に就て地盤研究所の著者は最も新しい材料を提供しその現象の調査、探察等を多角的に取扱つてゐる。
- 本間 仁・星 益和著 價一・二〇〇 下・一五
- (4) 土と杭と水
本書は土木技術の立場から見た土と杭と水の力學であり、水理學の權威者である著者の考察の鋭敏さを物語つてゐる。土木技術一般の好讀の良書たり得ると信ず。
- 大島 正滿著 價一・二〇〇 下・一五
- (5) 人類の進化
新しき日本の展開に伴ひ、大東亞の盟主たる日本人が、自己の進化發展の徑路を科學的に究明し、何が人間を進化せしめた要因であるかを知ることは我等に課せられた一つの義務である。
- 杉江 重誠著 價一・五〇〇 下・一五
- (6) ガラスと生活
現代の文化生活からガラスを取去つた後の世界はどんなに暗澹たるものであらうか。著者は本書を通して、ガラスと人間生活、ガラスと一般文化との關係更に科學的な物の考へ方を悉知させる。
- 白井 俊明著 價一・二〇〇 下・一五
- (7) 化學思想小史
古代人の物質觀、中世の鍊金術、ルネサンス以後の經驗的知識の集積とその整理、更に化學が少した苦難なる道程を説明してあります所ない。
- 宇田 道隆著 價一・二〇〇 下・一五
- (8) 海の探究史
著者は海に生命を捧げた世界幾多の科學者の尊き科學精神とその背景の史的展望の中に、海洋科學の眞髓を容易に把握させる。
- 松井 佳一著 價一・二〇〇 下・一五
- (9) 金魚
金魚が進化せしことを實驗遺傳學の立場から照明し得た世界的權威者である著者が語る金魚の生態、遺傳、種類等の興味的記述。
- 關 重廣著 價一・五〇〇 下・一五
- (10) 燈火の變遷
日本に於ける燈火の變遷の過程を古燈器を中心にして極めて興味深く説述し、古代の灯より近代電光燈までの過程を科學的に展開する。
- 池田 謙三著 價一・五〇〇 下・一五
- (11) 地寶と人生 [文部省推薦]
地寶は大自然の中から生れ、それは科學に立脚し、更に技術により、而して工業の力によつて人生に提供される。本書は地寶の開發利用を平易に説明するもの、南方資源の開發切なる時必讀の好書たり得るもの。

- 仁尾 正義著 價一・五〇〇 下・一五
- (12) 煙草の科學
煙草の科學的検討より、その生産と歴史、分布、農工、加工、化學的性質、戰爭と煙草の關係、衛生、趣味、パイプの點等豊富に論議する。
- 成瀬 勝武著 價一・二〇〇 下・一五
- (13) 橋
橋は路傍の一構造物である。小供はその傍を過つた時だけ心を惹かれるが大人はどうであらうか。本書は橋梁發展史より筆を起し、世界の橋、日本の奇橋等、傳説も入れて、橋の理論を説明する。
- 篠 遠喜人著 價一・二〇〇 下・一五
- (14) 十五人の生物學者
〔日本出版文化協會推薦〕
生きたし生けるものへの熾烈な探究精神に燃え込めた数多い古今東西の生物學者の中より十五人を選びその業績と研究精神を物語る。
- 鈴木 雅次著 價一・五〇〇 下・一五
- (15) 河
本書は水災國たる日本の河川に就て、遠く先人吾國の足跡を尋ね、近くは近代の治水の概要を映じ、更に進んでは河川が齎らす利益の數々を述べ以て河川の全貌を最も多角的に表現せんとするものである。
- 東條 四郎著 價一・五〇〇 下・一五
- (16) レンズ
〔文部省推薦圖書〕
レンズの基礎知識、實用上の効果と實例、技術との連關と進歩發達の経緯、各用途のレンズ相互の關係を一般的に論議して説かれる。
- 栗原 嘉名芽著 價一・〇〇〇 下・一五
- (17) 落下・上昇・遊遊の諸現象
宇宙間に起る諸現象のうちで、主として力學で説明出来る諸問題を選び、力學の原則と云ふ科學の武器を用ひて普通人に容易に理解出来るやうに説述する。
- 平山 嵩著 價一・五〇〇 下・一五
- (18) 厚生住宅
國防國家建設の線に沿ふ厚生住宅を検討し、併せて一般主婦、家庭人にもその建築學の概念を把握させ、衛生的住宅の積極的利用を主張する。
- 荒川 秀俊著 價一・二〇〇 下・一五
- (19) 日本氣象學史
著者の蒐集した豊富の資料に據り日本の氣象學史を敘し、更に我々の日常生活を左右する氣象現象を語り、氣象學界の恩人の風貌を紹介する。
- 吉村 信吉著 價一・五〇〇 下・一五
- (20) 地下水
本書は地下水の一つである地下水とはどんなものであり、人生と如何なる關係があり、我が國運の發展に對しても地下水資源として如何に重要であるかを述べ、その利用上の注意とを説述してゐる。
- 庄司 務著 價一・二〇〇 下・一五
- (21) 曹達と工業
世界曹達工業の發達と製鹽法の變遷を説明し、用途、性質、製造法に就て新しい知識を提供し、國民に遍くその應用を理解せしめんとする。
- 伊賀 秀雄著 價一・二〇〇 下・一五
- (22) 日常の電氣學
日常生活に直接關係の深い電氣現象、電氣設備、小型電氣器具、配線等に就て、その機能の科學的に説明し、記述また平明、簡潔にして家庭の主婦にも好著たり得る。
- 村川 梨著 價一・二〇〇 下・一五
- (23) 航空の物理
本書は航空發達史より筆を起し、航空の物理に關する目覺しいテーマのみを探り上げ、例へば流體力學等を平易に説明して飛行の原理を明かにし、翼と機體、プロペラ、航空發動機、航空機材に就ても物理的見地より説したものである。

<p>(24) 三浦伊八郎著 價一・二〇 千・一五 木炭の科學と常識 <small>〔文部省推薦圖書〕</small> 國民生活には勿論、我國國家經濟上にも重大なる役割を演じつゝある木炭に就て、正しい科學常識とその合理的利用法を講ず。</p>	<p>永村清著 價一・五〇 千・一五 航空母艦 <small>〔文部省推薦圖書〕</small> 近代海軍は將に空母と空母の死闘と云つても過言ではない程航空母艦は制空制海の覇者となるものである。本書はその最高權威者が語る造船技術の解明であり、海軍史話である。</p>	<p>福本喜繁著 價一・二〇 千・一五 螢光體 螢光物質の多い夢の前途は展開されんとしてゐる。この發見の歴史よりその製法、物理化學的の諸性質とその應用を述べ日常生活に深い關係のある螢光體を多角度に表示してゐる。</p>	<p>高木貞治著 價一・二〇 千・一五 近世數學史談 <small>〔日本出版文化協會推薦〕</small> <small>〔文部省推薦〕</small> 近世數學の動向に多彩なる業績を遺したガウス、モンチエー、アールベル等の九人の大數學者の風貌を紹介し、その秘れた數學上の數々の問題を隨筆的に語る。附録として回顧と展望、ヒルベルト訪問記等ある。</p>	<p>原徹一著 價一・五〇 千・一五 人生と榮養 農村の榮養改善に顯著な業績を残した著者が國民一般に正しい知識を提供せんとして國民の榮養問題に就て科學的嚴正なる批判を加へる。</p>	<p>増野實著 價一・二〇 千・一五 世界の大豆と工業 世界各國の大豆と工業の發祥と進歩の歴史を展覧詳述し、次いで大豆の科學的處理と利用の範圍を我國の國産資源的見地から強調したものである。</p>
<p>淺野巖著 價一・二〇 千・一五 食鹽 日常生活にはなくてはならぬ鹽も、その不足を來して急に大切にする様になる。この鹽の歴史、性質、世界の分布、製造法、鹽と人間生活、共榮國內の鹽等に就て平易に然も科學的に記述する。</p>	<p>中村清二著 價一・〇〇 千・一五 物理實驗者の心得 <small>〔日本出版文化協會推薦〕</small> 物理學の運用は主として實驗にある。本書は科學する人々のために物理實驗は如何にして行ふか、その實際上の苦心や體驗を平易に解説した。</p>	<p>土井新次著 價一・二〇 千・一五 アルコールの話 戦時下燃料として極めて重要な關係にあるアルコールの發見の歴史よりその製造、性質、殊に微生物との關係に就て興味深く物語る。讀者は本書を通して醸造化學の諸現象を容易に理解し得る。</p>	<p>渡邊貫著 價一・五〇 千・一五 地下資源の物理探鑛 關門海峡陸道の地質調査で有名な著者が物理探鑛法の通俗的な理論と現場測定作業の實際とを多數の圖面を巧みに驅使し興味深く語る。附録の鑛床の分類は炭田探鑛の唯一無二の好指針たり得ると信ず。</p>	<p>中村左衛門太郎著 價一・二〇 千・一五 大地震を探る 大地震は何うして起るか、これは地震國日本のなやみの一つである。本書は著者長年の経験を披瀝して大地震を探る興味深い方法を述べる。</p>	<p>石川榮耀著 價一・五〇 千・一五 國土計畫の生活圏 國土計畫の實際を明らかにし、生活圏建設を強調する著者最近の研究と大東亞國土計畫の總論を披露す。</p>

519.9

176

(7)

終